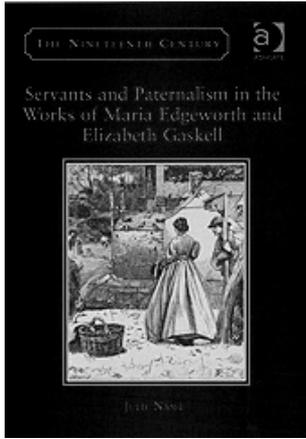


Julie Nash

*Servants and Paternalism in the Works
of Maria Edgeworth and Elizabeth Gaskell*

Aldershot, Eng.: Ashgate, 2007. 130pp.

加藤 匠



近年、召使いへの関心がどうも高まっているようだ。メイド喫茶やヴィクトリア朝期のメイドと貴族の恋愛を描いた漫画が人気を博している日本特有の現象ではなく、海外においても事情は同じらしい。著者のナッシュによれば、イングランドではふたつの家族が一週間ずつ交互に主人と召使いの役を演じる *Masters and Servants* というリアリティTVが人気を集めているらしいし、ヴァージニア・ウルフ夫妻と召使いの関係を論じた *Mrs Woolf and the Servants* (2007) が評価を集め、

歴史学者スティードマンによる、ある無名の召使いの生涯を扱った *Master and Servant* (2007) が出版されるなど、召使いへの注目が高まっていることは否定できまい。更に、召使いの視座から歴史を眺めるという構成をもつマーガレット・フォースターの *Lady's Maid* (1990)、ピーター・ケアリーの *Jack Maggs* (1997) をはじめとする昨今のポストモダンの歴史小説を念頭に置くならば、召使いが過ぎ去った時代に対するノスタルジアを呼び起こす存在であると結論づけることもできそうだ。このような状況からすれば、エッジワースとギヤスケルの作品において召使いがいかなる位置を占めているのかを論じた本書のような本が、19世紀の歴史や文化を踏まえた研究書を多く出版している Ashgate 社の Nineteenth Century Series の一部として登場することは驚くべきことではないはずである。

本書において、エッジワースとギヤスケルを結びつける要素とされるのは、歴史上の出来事に反応して作品を残したとされる点である。実際、1790年代のアイ

ルランドの政情不安定を体験したエッジワースや 1840 年代のチャーティスト運動を体験したギヤスケルにとって、そうした動きに対して何らかの反応を示すのは自明のことであつたろう。階級をめぐるヒエラルキーの再評価と再構築が行われるなかで、両者は共に時代の変化を歓迎すべきものと捉えてはいたものの、従来の社会に対する思慕を簡単に捨て去ることはできなかった。秩序を維持しながら、変化にいかにかに適応していくべきかを考察しようとする両者が選んだのが、「家庭内の活動に従事し、より大きな社会状況についても批評しうる」(2) 召使いだつたのである。ナッシュは召使いを作品に取り込むことによって、男女の社会的な役割を規定した“separate spheres”を超えようとしたと指摘する。

第一章“Servants and Paternalism”では、パターナリズムに対してどのような反応がなされたかが歴史的に概観され、そこに召使いがいかに絡んできたかが論じられている。あらゆる人々が階級という予め決められたものに基づいて社会秩序に寄与するべきであるというパターナリズムが浸透した結果、あらゆる人々がそのような「自然な」社会秩序に従うことを期待されることとなり、主人と召使いという主従関係もその例外ではなかった。19 世紀初頭に大きな影響力を持ったハナ・モアのコンダクトブックはこのような背景から成立しており、主人の側にも義務が伴うことを強調し、両者はあくまでも相互扶助の関係にあるとしたカーライルやビートン夫人にもその影響を見いだすことができるだろう。そうした背景のなかで、エッジワースやギヤスケルは召使いを通じて主人の腐敗を描き出し、そこからパターナリズムが崩壊する危険性を指摘したと、ナッシュは両者を歴史的に位置づけるのだ。このような位置づけを経て、第二章以降ではエッジワースとギヤスケルの作品が<家庭小説>と<社会小説>に分類され、交互に論じられることとなる。

第二章“Standing in Distress Between Tragedy and Comedy”では *Vivian* (1812), *Harrington* (1817), *Belinda* (1801), *Helen* (1834) といったエッジワースの家庭小説群が、第三章“Submitting to Fate”では *Cranford* (1851), *Ruth* (1853), *Sylvia's Lovers* (1863) といったギヤスケルの家庭小説群が扱われ、既存のパターナリズムが通用しなくなっている家庭の状態が、召使いと主人との関係に軸を置いて論じられている。この二章を結びつけるのは、「家庭生活や同じ屋根の下に住む雇用者と被雇用者の関係について書く以上、権力と政治の問題に触れざるを得ない」(51)

というナッシュの認識であった。たとえばエッジワースが描き出した召使いは、〈家庭の救世主〉と〈家庭を破壊しうる力をもつ者〉という従来のステレオタイプに則ったものであった。*Belinda* を例にとるならば、前者の例としてはヴィンセント氏に「ジュバは人間としても最高の人間だよ——そしてジュバは犬としても最高の犬なんだよ」と言い放たれる忠実な黒人の召使いジュバを、後者の例としてはフランス人チャンフォートを挙げるができるだろう。*Helen* の段階では、現状のパターナリズムへの反発や疑義が墮落した主人の姿を通じてより露骨に表わされるものの、自らが育った旧来の秩序への思慕をエッジワースが捨て去ることはない。

一方でギヤスケルはパターナリズムが機能しなくなっている状況をより明確に提示し、主従関係が機能しないほど墮落した主人の姿と、*Cranford* のマーサのような意欲に満ちた召使いが逆に主人のケアを担う姿を描くこととなった。ナッシュにとって、召使いはパターナリズムに内包する矛盾や問題点を前景化する存在であり、マーサはブラウン大尉に匹敵する社会の変革を象徴する人物に他ならなかったのだ。同様に *Ruth* や *Sylvia's Lovers* でも召使いがヒロインの代理親の役割を果たし、モラル面での再生において重要な役割を果たすこととなる。こうした表象を通じて、ギヤスケルはパターナリズムが転覆する可能性をエッジワース以上に明確に示唆するのである。

第四章“True and Royal to the Family”で扱われるのは *Castle Rackrent* (1800), *Ennui* (1804), *The Absentee* (1809) といった、エッジワースのアイランドを舞台とした小説群であり、第五章“Mutual Duties”では *Mary Barton* (1848), *North and South* (1855) といったギヤスケルの社会小説群が取り上げられることとなる。公私というふたつの領域の中間項にあたる存在として召使いが捉えられ、本来ならば家庭という私的な領域と結びつけられがちであった彼らが、不安定な社会状況を体現する存在であるとして、労働者と結びつけられて論じられることとなるのだ。

エッジワースがアイランドの状況に目を向けた作品のひとつが *Castle Rackrent* である。ここで彼女が描いたのは、ターディという〈家庭の救世主〉と〈家庭を破壊しうる力をもつ者〉という従来のステレオタイプのどちらに属するかが曖昧な召使いであった。ナッシュは、旧来のパターナリズムが十分に機能し

なくなったことで生まれた矛盾がターデイを通じて浮上したと解釈する。アイルランドを舞台とした次回作 *Ennui* においても墮落した主人の姿が描かれ、生まれつきの階級から個人の努力へという強調点の変化が見られる。一方で *The Absentee* においては、アイルランド人召使いの姿を通じて、主人であるイングランド人の腐敗が強調されることとなる。

エッジワースはパターンリズムに代わり得る方向性を明確に提示することはなかったが、その問題意識を受け継いだギヤスケルも明確な方向性を示すことはできなかった。*Mary Barton* において、階級闘争に対する解決策として、雇用者側にはヴィクトリア朝社会のヒエラルキーを脅かさないような範囲で労働者への姿勢を改めることを、労働者側には教育を通じて雇用者側への理解を深めることを要求するという、パターンリズムへの回帰ととれるものしか提示できなかったことは、その象徴と言えるだろう。そのなかでギヤスケルが注目したのが、主従関係をうまく機能させるための共感やケアの精神を軸とした、階級を超えた相互交流であった。労働者に対する同情心を欠くカーソン氏の姿勢は、召使いたちから距離を置くカーソン夫人の姿勢と対応する。ケアの精神や両者の協調を軸とした労使間の和解が容易ではないことは、*North and South* に登場する召使いディクソンが何よりも雄弁に指し示しているだろう。ギヤスケルにとって、「女性に与えられたケアの精神という理想を保ちながら専制的な権力者を批判するためには、家庭の救済者として召使いを前景化させること以上の手法はあり得なかった」(73) のである。

エッジワースがイングランドとアイルランドの問題をはじめとする社会や政治の問題に対する自身の見解を強調するために作品中で召使いを描いたように、ギヤスケルは雇用者と労働者の関係を追及するために召使いを描くこととなった。両者が召使いという間接的な手段を用いて当時の政治を論じようとした姿からは、当時の女性作家に課せられた束縛の強さが見えてくるはずである。ギヤスケルやエッジワースが召使いのもつこうした可能性をいかにもく利用していたかは、召使いたちを通じて〈パターンリズム／社会に対する反抗的姿勢〉、〈義務／野心〉、〈責任／放縦〉といった二項対立を作品中で提示していたことから窺い知ることができるだろう。召使いは作品の周縁に位置しながらも、こうした二項対立を通して、社会問題を作品内に取り込む媒介として機能したのである。こうした二項

対立を通じて、召使いを作品の軸として位置づけようとした本書の試みは、ある程度は成功していると言えるだろう。カルロ・ギンズブルグが“Clues”で実証してみせたような、作品の細部や周縁から作品を捉えなおす試みとして、召使いがエッジワースやギヤスケルと社会状況とのかかわりを考察するうえで重要な位置を占めることについては、見事に論じられている。ただ、家庭小説と社会小説という枠組を召使いを通じて結びつけようとした試みに、必ずしも成功しているとは言えないだろう。作品内で周縁的な位置づけにならざるを得ない召使いと主人との関係に注目するあまり、他の人物間の関係が軽視される側面があることは否定できない。

しかし本書の読者に残された最大の楽しみは、むしろ本書の読後にあるように思える。本書では、エッジワースとギヤスケルに論が限定され、他の作家が描いた召使い表象については展開されることはないのだが、他の作家の作品についても同様のことが言えるのかを確かめる余地が読者に残されているということなのだから。ナッシュは、ギヤスケルが同時代の作家以上に召使いに中心的な役割を与えたとしているが、ディケンズをはじめとする作家に、そのような表象は見られないということがあり得るだろうか。その意味では、本書は決して研究上の金字塔ではない。むしろ読者が本書の問題意識を踏まえ、本書で取り上げられていない他の作品へと発展させていくための土台とすべき一冊であろう。

(明治大学兼任講師)

